

学園大戦ヴァルキリーズ新小説版

- INTO THE COLDEST WINTER 1942 -

名無しの東北県人(本文)

sigama(表紙)

かえせ！未来を

この作品は山形県で起こった真実だけを描いている。

登場人物や団体は例外なく実名であり、作中で発生する事件も全て実際の出来事である。



一九四三年一月二十五日。

「先輩……私、先輩のこと……す……」

頬を染めた女子生徒が白い息を吐きながら憧れの対象である同性に想いを伝えた瞬間、六十メートル先から飛来した七・六ミリトカレフ弾が彼女の左側頭部に突き刺さった。

「キイツ！」

街中でおどましい断末魔の悲鳴を上げ、瞬時に絶命した少女の左眼窩から脳漿と血液の混ざり合った生暖かい液体がぶちまけられて路面上にうつすらと積もった白雪を溶かし、そこに華奢な肢体が右回転しながら叩き付けられる。

「えっ」

先輩と呼ばれたもう一人の女子生徒が眼前の死亡劇を目の当たりにして素っ頓狂な声を上げてしまったのと同時に、たった今びちやりと跳ねた泥と血の滴で顔を汚す彼女は車体

後部に完全武装の若者達を満載した四号戦車G型のキャタピラに巻き込まれた。

「おい！ 何か轢いたぞ！」

狭苦しいドイツ製戦闘車両の中で装填手がロシア語の怒鳴り声を響かせる。

「野豚か何かだろ！」

同じロシア語でそう返した操縦手と装甲板を挟んだすぐ向こう側では、腐肉が何層にも渡ってこびり付く履帯がつい数秒前に絶命した後輩同様に冬用学生服に包まれた骨ばった部分のない柔らかかで瑞々しい肢体を巻き込んで滅茶苦茶に破壊していく。

「豚が街中にいるのかよ！」

「いるだろ！ 街中にいる豚だ！」

装填手と操縦手の全くかみ合わないやり取りが続く一方で、濡れた赤錆の間からは肉の引き裂かれるぞつとするような破壊音が鳴り響いた。

「皆殺しよ！ 人民生徒会に無実なる者はいない！」

ドイツ連邦共和国の代理勢力であるシュネーヴァルト学園から非合法的な手段でここへと持ち込まれた鉄馬は停車し、角ばった車体から飛び降りた少女——左腕に敵味方識別用の黄色い腕章を巻いていること以外はコンクリート舗装と半ば一体になってしまった二人の美少女と同じ恰好だった——がTT-33拳銃を掲げて叫ぶ。

「蛆虫共の誇りは暴力で踏み躪る！」

彼女の号令と共に骸骨が描かれたバラクラバで顔を覆い、ナポレオンの歩兵連隊さえも

一人で圧倒可能な恐るべき重装備に身を包む兵士達の群れが走り出した。

「前世紀の終わり……」

後にアルカの春と呼称される出来事の舞台となった学園都市サカタグラードの片隅から不愉快極まりないグレン&グレンダ社のラジオ放送が流れ始める。

「巨大隕石の落下と」

事務的な声が響き渡る中クーデター軍の兵士達は今まで圧政を敷いてきた人民生徒会が立て籠もるヴォルクグラード人民学園の校舎に向けて死に物狂いで前進した。

「ブローハ6・1、攻撃します」

人民生徒会の打倒を願う他校からは自由学生同盟軍と呼ばれてもいるが、実際のところ明確な正式名称が存在しない武装勢力に身を置く彼らが一人また一人と撃ち倒されていくその頭上を濃緑色のマナ・ローブに身を包んだ戦乙女が高速で通過していく。

「それがきつかけとなって始まり、その後十五年間続いた世界規模の戦争が人類に歴史上類を見ない未曾有の被害をもたらしました」

砲弾の直撃で半ば崩壊し弾痕だらけになった建物の外壁を舐めるかの如く高度を下げたヴァルキリーは大地に爪先が着いた瞬間から、T・34／85中戦車の残骸を防壁にして激しく抵抗する人民生徒会派の生徒達に襲い掛かる。

「チェキスト共が！」

最初に強い憎悪を込めて叫んだ彼女は吹き飛んだ右手人差し指を黄ばんだ包帯で覆い、

代わりに爪が剥がれた中指でSVT・40半自動小銃のトリガーを引いていた女子生徒の細く白い首を身の丈程もある大型トマホークで刎ね飛ばした。

「混乱はグレン&グレンダ社によって収められました」

青い粒子が漂う中で首から上を失った少女の両手が力なく下がりが、続くヴァルキリーの連撃を浴びた胸元で血液が弾け肉体が路面に湿った音を立てて崩れ落ちる。

「そして同社は今後一切、人々が争わずに済む世界を作ろうと考えます」

視界右端に新たな目標を発見した戦乙女はマナ・ローブの燕尾を大きく振って真鍮製の空薬莖や自殺に使われた青酸カリの空瓶が転がる地面を蹴る。

「パステルナークの犬め！」

ヴァルキリーはPPSh・41短機関銃の連射を浴びせ掛けてきた女子生徒が八発目の発射を感じ取る前に肉薄し銃口から撃ち出された熱い弾丸が自分の背中側にある街路樹に突き刺さるよりも早く右下から左上へと切り上げる鮮やかな一閃を放つ。

「それが戦闘用の人造人間……プロトタイプを教育し」

大斧の鋭い一撃で跳ね飛ばされた少女の右手首が赤黒い血液の曲線を描きながら得物を持ったままの状態で泥濘の上に落ちた。

「彼ら世界各国の代理勢力たる学園に所属させ、アルカという永久戦争地帯でそれぞれの母国の代わりに戦わせるシステムなのです」

ヴァルキリーは悲鳴を上げる女子生徒が自分は右手首から先を失ったのだという事実を

理解する前に左一回転、右手に携えた鉋で今度は彼女の胴体を両断した。

「今や民族対立や資源の利権争いといった国家間の問題は何の例外もなくアルカにおける代理戦争で全て処理されています」

上半身は鮮血と黄褐色の糞便を勢い良く噴射しながら錐揉み回転して宙を舞い、湿った音を立てて地面に倒れた下半身の断面からは薄桃色の腸が湯気と共に広がる。

「つまり戦いは人類にとって永遠に過去のものとなったのです！」

グレン&グレンダ社というメッキ光輝く支配者の無責任かつ傲慢なラジオ放送を無音と認識している少女は残りの雑魚共をプロトタイプの間達に任せ、灰色の後退翼が左右に伸びるヴァルキリー専用の背部飛行ユニットからマナ・エネルギーの粒子を噴射して幾千幾百もの光芒瞬くヴォルクグラード人民学園本校舎へと向かった。

「取り付いた！」

七分十二秒後、外壁を爆破してヴォルクグラード人民学園の校内に一番乗りで侵入したヴァルキリーは廊下を滑走、一路生徒会長室へと急ぐ。

「デイミトリ・カローニン！」

ロングコート然とした濃緑色の戦闘服を纏う戦乙女の口から権力の座に就くなり学園を私物化し大勢の反対者を処刑もしくは投獄した、自分達の最大の敵の名前が響いた。

「奴さえ殺れば！」

ヴァルキリーは割れた外壁から外気が入り込んでいることに起因する肌寒い向かい風を

顔に浴びつつ、ある日突然人民生徒会の秘密警察に連行され、翌日見せしめとして校庭の木にロープで吊るされた隣席の少女の死体を思い浮かべる。

「奴さえ——ッ！」

級友はただ人民生徒会への些細な不満を口にしたただけだった。

「奴さえ！」

単にそれだけなのだ。

「デイミトリ・カロニンは絶対に屈しない」

ラジオで嫌という程聞いてきたヴォルクグラード人民学園現生徒会長の声が聞こえた時、怒りによって突き動かされるクーデター軍の尖兵は視界に異形を捉えた。

「デイミトリ・カロニンの命があるうちは」

彼女の往く手を遮るかのように通路奥に鎮座した黒い影が変形を始める。

驚愕に大きく目を見開いて思わず着地してしまったヴァルキリーの前で蟹の甲羅に似た胴体の——恐らくは機械、だが明らかにこの時代のものではない——側面から八本の足が地面に伸びて開き、既存の兵器体系から大きく逸脱した機体を持ち上げた。

「絶対に政権交代はない」

次に二つに割れたその上面から人間の上半身じみたフォルムがゆっくりと起き上がり、先端にあるトカゲのような頭部で双眸が赤い光を放つ。

「わ、私の頭は……」

たちまち両足を恐怖で震わせるようになったヴァルキリーは首を左右に振って咆哮し、廊下に面した全ての窓ガラスを一瞬にして粉碎させた機動兵器の前で絶句する。

「私の頭は……」

各部から青いマナ・エネルギーの粒子を放出する異形こと変形式機動兵器スヴァログは誰一人としてその姿を見たことがない生徒会長自身の操縦で金属音を鳴らしながら眼前の光景が全く理解できずに顔を大きく引き攣らせて立ち尽くす少女に接近した。

「おかしくなったの……？」

まるでギリシャ神話に登場するケンタウロスがそのままサイボーグ化されたかのような機動兵器からの攻撃でヴァルキリーが血の霧になって吹き飛んだのは、その直後である。



一九四二年六月五日。

ぬめった触腕が撃破され砲身を垂らしているT・34／85中戦車の側面を強く打ち、ソ連本国の第百八十三ウラル戦車工場からアルカ北西のサカタグラードへと持ち込まれた一両をビルの外壁に叩き付ける。落下した瓦礫が夜の学園都市に転がるヴォルクグラード学園軍兵士達の死体に降り注ぎ肉や骨の砕ける不快な音を響かせた。

「一人の子供も生き残っていないのは確かだ！」

舗装を蹴って跳躍、瞬時に瓦礫の雨を突破したヴァルキリーは狗琉牙——くるが——と名付けられた日本刀による斬撃で自分に迫ってくる黒ずんだ赤の先端を切り落とす。

「戦場から逃げた卑怯者共がやったのだ！」

だが間髪入れずに伸びてきた新たななる触腕は危険を感じて反射的に右方向へと側転したマリア・パステルナークが半秒前までいた場所を一撃で深く抉り、コンクリートの破片や今に至るまでの戦闘で作り出された細切れの肉片を宙に舞い上げた。

「しかも王の天幕にあったものを全て燃やすか持ち去っている！」

両足裏を舗装道路に着けたマリアが燃える車両に全身を照らされながら立ち上がると、満月の下を緩い円を描いて接近してきた前進翼式の背部飛行ユニットが機首先端を真上へ向けて彼女の腰辺りにある支持架と自機の腹面をドッキングさせる。

「それゆえ王は！」

翼を得た紺色の髪の少女が纏うマナ・ローブは通常のそれとは大いに異なる。

「至極当然ながら全ての捕虜の喉を掻き切らせた！」

漆黒を基調としたM11型マナ・ローブは全身に密着して肢体のラインを浮き立たせ、腹部や胸元の紫には幾何学的な模様が刻まれている。

「ああ、勇ましい王よ！」

また両上腕部や臀部、太腿等は一切覆われておらず、股間に至ってはハイレグカットになつていた。だが纏っている本人は些かも恥じらっている様子はない。

「何という巨大なタコだ」

シェークスピアのヘンリー五世の台詞を特に意味もなく引用したマリアは刃を振るって日本刀にこびり付いた青い血を払い、地面を半円状に汚してから背中の中へ戻す。

「それにこの戦闘力……貴様、只のタコではないと見える」

そして琥珀色の瞳で突如サカタグライドに出現し駆け付けたヴォルクグライド学園軍のタスクフォース501を蹴散らした体長十五メートルはある大ダコを睨んだ。

「だが私は単なる姉だ！」

背部飛行ユニットから青白い光を放つマナ・エネルギーの粒子を噴射して飛び上がり、大ダコが繰り出した更なる触腕の三連撃を難なく回避したマリアは両手を振り上げてから溜め込んだ力を放出するかのよう左右に広げる。

「政治的野心などない！」

M11型マナ・ローブ同様に漆黒の占める割合が多い背部飛行ユニットの上面が開き、内部にぎっしりと詰め込まれていた多目的誘導弾が濛々たる白煙と共に撃ち出される。

「貴様は塩気が多そうだ」

発射された五十二発にも及ぶ鉄槍は緩やかな白い曲線を描いて海魔へと迫り――。

「だから喰わん。死ぬ」

着弾した。街並み震わす大音響と共に大ダコが盾にした触腕が眩い閃光の中心で四散、大小の欠片になって頭足類特有の青い血液で汚れた舗装の上に落着する。

「やったか？」

頸椎部から臀部にかけての美しい曲線が背骨にも似たM11型マナ・ローブのパーツで露骨に強調されているマリアが弾力のある胸の双球を微震させて一歩前に出た瞬間、濃い煙の中から触腕が飛び出して彼女の左足首に巻き付いた。

「しまった！」

マリアは大ダコから宙に放り投げられるが、ヴォルクグラード学園軍参謀総長でもあるヴァルキリーは露出した尻たぶを波打たせつつ空中で体勢を整え、両足に取り付けられたエグズスケルトン——身体能力補助用の強化外骨格——のアクチュエーターを使いビルの外壁を思い切り蹴って海魔を飛び越える。

「だがここは私の庭だ！」

着地するなり口元を緩めたマリアは大ダコが慌てて向き直る前に急接近、右手で鞘から引き抜いた狗琉牙の一閃で丸く大きい胴体部に裂傷を与え、渾身の力を込めてその全てが鋭い爪に似た装甲で覆われている指を出来たばかりの傷口に突き入れる。

「貴様の海ではない！」

両足だけではなく上半身にも取り付けられている強化外骨格によって大幅な身体能力の向上が行われているヴァルキリーによって傷口は大きく左右に広げられた。

「この私、マリア・パステルナークの王国なのだ！」

粘液が鈍光を放つ切れ目から大ダコの青い血が溢れ、双眸に炯々と光る刃の如き鋭さを

宿らせた少女の足元には絵の具を零したかのような光景をが作り出された。

「三連ハイパー・ランチャー、スタンバイ」

いつの間にか触腕が残り二本だけになってしまった大ダコの殆ど悪足掻きに近い抵抗を嘲笑うかのように後方宙返りを敢行し海魔との距離を取ったマリアが纏うエロティックなスーツの腹部が左右に開き、上に二つ下に一つのパラボラアンテナ型照射装置が露になる。「発射」

薄皮と言っても過言ではなく、明らかに火器を内蔵する空間などどこにもない戦闘服から膨大なマナ・エネルギーが解き放たれた。三つの照射装置から伸びた虹色の粒子ビームは収束した凶太い形で大ダコを直撃し、傷口から剥き出しになった体内を徹底的に破壊してそのまま海へと繋がる水路に押し出した。

「深追いするのは危険だな」

腹部を閉じて虎の子たる三連ハイパー・ランチャーを収納したマリアは致命傷を負った大ダコの青い血が浮かぶ水路から二度と動くことはない部下達に視線を向ける。

「一体誰の仕業かは知らんが……」

触腕の一撃を受けたヴァルキリーの上半身だけが道路上に転がり、そのすぐ横の焦げた街路樹脇ではT・50軽戦車が乗員四名と共に燃えて悪臭を放っていた。

「私の……」

陰惨な光景を目の当たりにしたマリアは苦々しげに吐き捨てる。

「私の道具を減らした罪は絶対に償わせてやるぞ」



かつて日本の山形県と呼ばれていた地に点在する学園都市にはそれぞれ必ず全校共通の規格で作られた、長方形でこれといった特徴のないヨーロッパ風の巨大な学生寮がある。

「……ん」

夜十時を回ったサカタグラードにも例外なく建つその一つの中で目を覚ましたマリアは一糸纏わぬ姿でベッドを降りると、足元に落ちていた男物のワイシャツを羽織った。

「もう……」

布擦れの音と共にベッド上で盛り上がった白いシートが微動し、ベランダに出て涼しく心地良い夜風を浴びるマリアと同じ紺色の髪と琥珀色の瞳が覗く。

「姉さん、それ僕の服だよ」

「同時に私の服でもある」

部屋側に向き直ったマリアは肩口まで髪を伸ばす、言われなければ誰もが少女であると勘違いしてしまう程の可愛らしい少年……ユーリ・パステルナークに優しい口調で告げた。

「私が性別が違うだけのもう一人のお前であるように」

マリアは話しながらベッドに戻り膝を折って揃った弟の両足を跨ぐ。

「お前は性別が違うだけのもう一人の私だ」

そして頬を染め、パジヤマ姿のユーリの手を自分の胸に押し当てる。

「姉さ——っ」

掌に走る指によって撓む豊満な感覚ですぐ姉よりも赤くなった弟が上擦った声を上げた。

「だからお前のものは全て私のものだ。私のものが全てお前のものであるようにな」

瞳に妖しい光を湛えて上唇を舐めたマリアはベッドに寝そべり、おいでと微笑んだ。

「お姉ちゃんの一つになろう」

返答の代わりはチベットスナギツネめいた表情のユーリから伸びる冷たい視線だった。

「むー！」

姉は頬を膨らませて横になったまま自らの膝横を何度も叩く。

「むきー！」

またベッドを叩くがユーリの表情は全く変わらず、逆に弟は姉から離れようとした。

「この世間知らず！」

姉はYESの文字とハートマークが描かれた枕を抱きながら「へえっ？」と素っ頓狂な声を上げたユーリに心底不機嫌そうに言う。

「こういう時はお姉ちゃんを黙って抱くのが常識なんだぞ！」

「姉さんの常識は世間の非常識だっていい加減理解してよ！」

「やだ！ やーだやだ！ やだ！」

隙あらば弟と性的交渉に及び退廃的かつ倫理的に決して許されないであろう既成事実を作らんとする姉は口を三角形にしながらジト目でユーリを見た。

「超ブラコン怪獣のお姉ちゃんが寂しさのあまり死んでもいいって言うんだな！」

「姉さんの生命力はゴキブリ以上でしょ……」

「わーん！ 酷い！ いいもんお姉ちゃんは失敗作だもーん！」

枕を抱えてうつ伏せになり足をばたつかせる姉を見たユーリはまたか……と辟易する。

マリアは人類の歴史上初めてマナ・エネルギーとの親和性を有しヴァルキリーとなったテウルギストと呼ばれる変異体の成り損ないだった。瞬時にしてアルカ学園大戦における食物連鎖の頂点に立った存在を自分達も作り出すべく各国が湯水の如く資金とリソースを投入するも、誰一人としてテウルギストと同等の能力獲得に到らなかつた規格落ち個体群こそユーリの姉を始めとする第一世代ヴァルキリーである。

「そんな私が今やヴォルクグラード学園軍の大佐になり参謀総長の地位を任されている」

「凄いと思うよ」

「だが、まだまだ満足も安心もできないぞ」

ユーリはベッドの上に正座し、膝に枕を載せた姉を見て再びまたか……と辟易する。

「まだまだお前を守るには力が足りな過ぎる」

「そ、そうかな……？」

苦笑いするユーリの胸中にこの話を姉に聞かされる度に覚える重い感覚が広がり始めた。

「そうとも。今の私にはあまりにも力がない」

絶対には口には出せないが、ユーリは何を根拠にマリア・パステルナークという名の姉が自分には力がないと言えるのかと強く疑問に思う。

「何もかも足りていない」

今やヴォルクグラード人民学園内部における姉の派閥は人民生徒会を打倒可能な唯一の組織だと他校から強い期待を寄せられる程の一大勢力であり、グレン&グレンダ社にさえ強い影響力を持つと噂されているマリアは本来ならばどこにでもいるプロトタイプとして戦場の露と消えるはずのユーリを徴兵と揶揄されるタスクフォースへの配属から表沙汰にできないやり方で徹底的に回避させ続けてきた。

「私は何一つ安心できていない。もつともつと上に行かなければならない」

「まだ……足りないんだ……」

ユーリは確かにそれらに対して感謝はしていたが、自分の姉がどうやってその力を手に入れたのか、加えてその過程でどれだけ多くのプロトタイプやヴァルキリー及び人間達を殺したかについては恐ろしくてとても聞けなかった。

「ところでクラスに気に入らない奴はいないか？ お姉ちゃんがワニの餌にしてやるぞ」

「いや、大丈夫だよ……」

「はつきりしない口調だな。我慢する必要はないんだぞ？」

唐突に話題を変えたマリアは心配そうな表情でユーリの顔を下から覗き込む。

「お姉ちゃんに迷惑を掛けたくないと思っっているのか？」

「いや……本当に……」

今夜もユーリは一体何度感じたのか皆目見当も付かない姉の自分に対する過大な好意と自分の感情とのギャップに困惑してしまふ。

「じゃあ他の学園の生徒には？ グレン&グレンダ社の社員には？」

「いや本当に大丈夫だから……」

確かに自分は姉のことが大好きだが、それは姉弟の関係である以上当然の感情であり、マリアのように自分の人生の全てを捧げてまで障害となる存在を徹底的に踏み潰すことに全力を尽くす程ではない。また残酷な比較ではあるがユーリの姉に対する好意とマリアの弟に対する好意の強さは明らかにイコールではなかった。

「本当に僕は大丈夫だから」

正直なところユーリは姉が苦手だった。幾つも便宜を図ってくれたり何度も命を救ってくれたことには感謝している。だが、それでも姉から寄せられ続ける強過ぎる好意が全く理解できず恐怖として常に心に消えない染みを作り続けているのだ。

「姉さん……僕は……」

ユーリが退屈な授業中に何十回何百回と練習した「僕達は距離を置くべきだ。お互いのためにも別々に暮らそう」というたった一言を眼前の姉に向かって口にしようとした時、突然窓外から乾いたエンジン音が聞こえてきた。

「車の音？」

「こんな時間に一体何だろう？」

ベッドを降りて窓際から僅かに顔を出した姉弟の視線の先では人民生徒会の秘密警察に所属する生徒達が軍用車から降り、学生寮B棟へ足を踏み入れていく姿がある。

「開けろ！」

整った格好で皆賢く見え、しっかりと磨かれた牛革靴を履き、濃いサングラスで目元を隠している男子生徒が張り上げた怒声と叩き割らんばかりの勢いでドアをノックする音は道路を挟んで反対側に建つマリア達のいるA棟にまで聞こえてきた。

「出る！」

電気を点けて応対するなり顔面を殴打された女子生徒は常時お互いを監視し合っている秘密警察の面々に髪の毛を掴まれ、引き摺られるようにして強引に外へと連行される。

「鶏は金を払って買う」

秘密警察の生徒は汗ばんだキャミソール姿で顔に濃い青痣を作った女子生徒を跪かせ、その後頭部にTT・33拳銃の銃口を押し付けた。

「だからお前には鶏以下の価値しかない！」

すぐに銃声が鳴り響き、少女は何故自分が射殺されるのかを全く理解できないまま尻を上げて頭から崩れ落ちた。赤黒い血の池がまだ生暖かい死体を中心にして広がる。

「——ッ」

砕けて噴火口のような有様になっているその後頭部を見てしまったユーリは恐怖に顔を引き攣らせてマリアの胸に飛び込む。

「大丈夫だ。お前は私が守る」

精強なヴァルキリー、学園軍大佐、学園軍参謀総長という三つの素顔を持つ姉は力強い口調とは裏腹に優しく自分と同じ遺伝子配列を持つプロトタイプの背と頭を撫でてくれた。

「寄生虫共め……」

明確な憎悪を込めて窓外の光景を睨み付ける姉の声を聞いてユーリは確信する。

確かにこの人は怖い——だが、この人がいるからこそ自分はあるからこその自分はあんならなで済むのだと。



一九四二年六月六日。

「見つからなかっただど？」

小奇麗なヴォルクグラード人民学園参謀総長室で保安人民委員部の——同学園における諜報組織等を統括する機関——高官とチェコ製木机越しに向き合う自称超ブラコン怪獣はソファの上で不機嫌そうに足を組み直す。

「はい……巨大なタコの記録は見つかりませんでした」

高官と言えは聞こえはいいが、マリアの根回しによって現在の地位を得ただけの気弱な

男子生徒は目に見えて怯えた様子となり、額に浮かぶ脂汗をハンカチで拭き取る。

「私はそんな答えを聞くために毎月何万ドルも貴様らに支払っているわけではないぞ」

人民生徒会を唯一打倒できる存在として西側諸校から期待される一方で人喰いと呼ばれ恐れられてもいる黒き王は突き刺すような視線を高官に浴びせる。

「私の目を見て、はつきりとした確証を持って見つかりませんでしたと言えるか？」

「わ、我々として潤沢な人的資源があるわけではなく……」

マリアは自らの操り人形に対してわかったと納得の頷きを送る。

「では公務そっちのけで避妊具なしの乱交パーティーを楽しむ貴様の写真をアルカ全土にばら撒く際にはそう説明書きを付けることにしよう」

一瞬の安堵を即座に消し飛ばされて顔面蒼白になった高官を横目で見るマリアは自分のすぐ右脇に立つプラチナブロンドの少女に「な？」と謎掛けた。

「はい」

エレナ・ヴィレンスカヤは後ろで手を組み足を開いた状態で頷く。

「私も同意見です」

上官と同じようにセーラー服の左胸部と右上腕部にそれぞれ赤地に黄色で描かれた鎌と槌の徽章と赤い星が配置されたパッチが縫い付いている彼女はユーリの姉と同じ第一世代ヴァルキリーであり、BFにおける多くの代理戦争でマリアと共に死線を潜ってきた。

「再度……再度調査致します」

「それがお前のためだ」

自分には一切の逃げ道がないことを再確認させられた高官が死人の表情で退室した後、参謀総長の執務机に戻ったマリアは机上に置かれている額に入った弟の写真を見つめる。

「ああは言ったが……」

マリアの言葉には不明瞭さが滲み出ていた。

「人民生徒会の仕業でしょうか？」

「いいえ、我々の仕業です」

先端で結われている長髪を微震させたエレナに対し、ヴァルキリー二人しかいない今の参謀総長室の中では絶対に聞こえるはずのない男の声で返答があったのはその瞬間だ。

「誰だ！？」

突如瞬いた光の中から室内に現れた者達を見たエレナは驚きの声を上げ、

「同志大佐、お下がってください！」

自分の体でマリアを庇うようにして執務机前に入る。彼女はスカートに隠れた両太腿の鞘からナイフを抜いて投擲するが、研ぎ澄まされた刃は全身にアルミホイルを巻き目元をサングラスで隠した男を通り抜けて反対側の壁へと突き刺さった。

「これはホログラム越しの立体映像です。私達はアルカ某所に停泊中のマザーシップからヴォルクグラーード人民学園内のお二人に呼び掛けています」

「ほう……」

自らの腹心に武器を鞘に戻すよう指示したマリアは顔の前で両手を組み、自分の表情を伺えない状態にしてから来訪者に説明の再開を求める。

「私達は二〇一五年の八月十四日——つまり未来からタイムワープして来ました」

自称未来人の全身アルミホイル男性は続いて左右に立つ、メイド然とした軍服の基調となっている色がそれぞれ赤と青である以外は何もかも同じ姿の少女を紹介する。

「そしてこの二人はマザーシップ内で作り出されたクローンヴァルキリーです」

初めましてと全く同じ声と言葉を被らせた二人は全く同じタイミングで頭を下げ、全く同じタイミングで頭を戻し、全く同じタイミングで瞬きした。

「更にM11型マナ・ローブも我々が秘密裏に供与したものです」
「なるほど」

この言葉によりマリアの中でアルミホイル男は自称から本物の未来人へと格上げされた。

「あれは良いものだ」

「ありがとうございます」

一切の補給及び整備が不要であり、内部で無限に多目的誘導弾を生産できる意味のない露出部だらけのエグゾスケルトン付き戦闘服も未来製だと考えれば一先ず納得が行く。

「ではあの大ダコもお前達か？」

「はい。ですが、その前に我々がこの時代にやってきた理由をお聞き頂きたい」

「いいだろう」

マリアから了承の頷きを送られた未来人は本題を話し始める。

「二〇一五年現在、グレン&グレンダ社は崩壊し、世界は国家による自治独立が行われるアポカリプス・ナウ以前の形へと戻っています」

「容易に予想できる未来だな。アルカにおける代理戦争は辛うじて国家間の諸問題ならば解決できるかもしれない。だが、その枠組に囚われない民族同士や宗教間の衝突には一切対応することができん。ヴォルクグラード人民学園の大佐如きにも理解できる話だ」

「グレン&グレンダ社崩壊のきっかけを作ったのは貴方の弟であるユーリ氏です」

「ユーリが……？」

マリアの口調には当初支配者の凋落に対する喜びと嘲笑が見え隠れしていたが、流石の彼女も自分の弟がその原因とは思わなかったらしく表情を強張らせた。

「我々は二〇一五年の世界では少数派であるグレン&グレンダ社残党の手によって未来を変えるためにこの時代に送り込まれ、ユーリ氏の抹殺を命ぜられました。これこそ我々が一九四二年のアルカへタイムワープした理由です」

「だが解せん。だったら何故私にそんなことを言う？」

「我々は大ダコを使ってサカタグラードに対する破壊活動を行い、ユーリ氏を殺害するか身柄を引き渡さない限り攻撃を続けるとパステルナーク大佐を脅迫する予定でした」

アルミホイル男の代わりに彼の左に立っていた赤の戦乙女がマリアの疑問に答える。
「しかし、昨日の戦闘で大ダコはドック入りが必要な程のダメージを与えられました」

次に右に立つ青の戦乙女が説明した。

「よって我々は残されていた資料を分析し、貴方が権力のためならば平気で肉親や部下を売る人間の屑であることに着目して作戦を脅迫から交渉に切り替えたのです」

今度は統制官とクローンヴァルキリー達から呼ばれるアルミホイル男本人が話し始めた。「もしも我々の要求に応じてパステルナーク大佐ご自身がユーリ氏を殺害、もしくは殺害前提で我々にその身柄を引き渡して頂けるのなら、我々は大佐にクローンヴァルキリーの生産プラントや二十一世紀にて開発された機動兵器群を無償で譲渡させて頂きます」

「それは魅力的な提案だな。きっと人民生徒会との戦いで大いに役立つだろう」

「ユーリは下衆な笑いを浮かべて「いいだろう。ユーリを殺そう」と三人に約束した。

「同志大佐!？」

ここまで表情一つ変えずに感情を押し殺して沈黙を守っていたエレナが敬愛する上官の信じ難い発言を耳にして弾かれたかのように体を彼女へ向ける。

「一体何を仰っているのですか!？」

「別に驚くようなことは何も言っていないぞ。お前は知らないのか?」

回転式の椅子に踏ん返り返ったマリアは口元を大きく歪めて白い歯を剥き出しにした。

「私は権力のためならば平気で肉親や部下を売る人間の屑なんだぞ?」

製本版に続く

マリアをやっつける ハイライト

アルカ誕生以前には月山と呼ばれていたルナ・マウンテンには、学園同士を戦わせて国
家間の諸問題を解決する永久戦争地帯の水事情を一手に引き受けるダムが存在する。

「外の世界は如何でしたか？」

「人間以外は美しいと感じた。だが、この時代の人々は原始的で野蛮極まる」

全身にアルミホイルを巻き目元をサングラスで隠す統制官は月明かりに照らされた夜の
水面の遙か奥底に身を潜めるUFO然としたマザーシップ内部でギリシャ神話に登場する
ケンタウロスに似た形の機動兵器を見ながら背後に立つ同じ姿の部下に答えた。

「やはり我がグレン&グレンダ社による統治こそが世界平和を実現する唯一の方法であり、
人々の穏やかな生活を維持するために必要なのだと痛感させられた」

先日マリア達とホログラム越しの面会を果たし、交渉を成立させたグレン&グレンダ社
残党の一九四二年派遣部隊リーダーが異形の機動兵器から部下に向き直り、まだ赤と青の
クロンヴァルキリーがユーリ・パステルナークの死体引き渡しから帰還していない件に
ついて話そうとした瞬間、リングを付けたゴムボールをスプレーで銀色に塗っただけにも
見えるシュールなデザインの船体が激しく揺れた。

「砲撃です！ 当艦は砲撃を受けています！」

管制室のオペレーターが通信機越しに格納庫にいる統制官に大声で叫んだ通り、空高く

打ち上げられたドイツ製照明弾によりダム周辺は昼間のように明るくなっており、山肌に沿って作られた自動車専用道路上に並んだソ連製 ZiS-3 野砲やカチューシャロケット、更に八十五ミリ高射砲の榴弾射撃まで加わった絶え間ない猛砲撃のせいで水面に凄まじい破壊の旋風が巻き起こる様をはっきりと映し出していた。

「攻撃！ 攻撃！」

マグネシウム・リボンの激しい燃焼により照らされる大小様々な水柱が立っては消える貯水施設に気紛れサド的暴力大作戦の主役……総攻撃を開始した地上部隊同様に事実上のマリア親衛隊であるタスクフォース501所属のヴァルキリー達が背部飛行ユニットから左右に伸びる後退翼を翻して一斉に降下、両手で抱えた対潜用爆雷を水中に放り込む。

「原始人共め……！」

至近距離での爆発で激しく揺れた船体内で危うく転倒しそうになった統制官はマリア・パステルナークが約束を裏切り、捕えたクローンヴァルキリーから著しく人権を無視した前時代的かつ非人道的な方法でマザーシップの居場所を聞き出したことを確信した。

「直ちに離水する！」

「しかし上空には敵のヴァルキリーが！」

「サメを射出して応戦しろ！」

管制室に戻ってきた統制官の指示と共にマザーシップの船体から全長五メートルはあるサメが発進、水面から飛び出すや否や不用意に低空を進んでいた戦乙女に襲い掛かる。

「今日は何の日か教えてやる！」

部下の下半身がダムに落着して水飛沫を上げる光景を目の当たりにしたエレナは両手に装備したチェンソーから耳障りな駆動音を鳴らしつつ高度を下げ、マナ・エネルギーの青い粒子を噴射しながら水面を撫でた。サメを誘い出し、真正面から両断するためだ。

「貴様らの命日だ！」。



「逃がすな。撃ち落とせ！」

エレナとマリアの短いやりとりの後、他の兵器と同じくダム脇の道路にずらりと並んだ八十五ミリ高射砲が一斉に火を噴き、上昇していくマザーシップに多数の直撃弾を与えた。

「そんな……完璧な計画だったはずなのに……」

火花を散らし、機体各部から白煙を噴き上げて落下する母船の中で柱の下敷きになった統制官は口元のアルミホイールから血を滴らせて弱々しく漏らす。周囲には爆発で息絶えたグレン&グレンダ社残党の構成員達が何人もうつ伏せで横たわっていた。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアス！」

身動きの取れない統制官は倒れたまま最後の力を振り絞って震える両手を上げ、

「起動オオオ！」

絶叫しながら左右に倒し死亡した。

「地震……！？ いや違うぞ！ これは……」

マザーシップが黒煙を立ち昇らせながらダムに水没する様に歓喜の大歓声を上げていた。タスクフォース501のプロトタイプ達が地響きと共に割れた足元に飲み込まれる。

更にそこから現れた大ダコの触腕が貯水施設の周囲に展開するT・34／85中戦車やZiS・3野砲を次々に叩き壊して焼けた人体や金属片を飛び散らせ、地上部隊の指揮を執っていたエレナも横薙ぎの一撃を受けて地面に叩き付けられてしまう。

「大ダコが進化している……」

急行してエレナを抱き起こしたマリアは割れた地面の中から出現、ダムを背に雄叫びを上げる怪物——自分がつい二日前に撃退したタコを見て表情を強張らせる。頭部はサメのそれに換装されており、タコ自体の部分も前回の倍以上の大きさになっていたからだ。

「エレナ、逃げろ」

マリアは決して軽くはない傷を負うも自分の力で立ち上がった戦乙女を守るようにして超パワーアップした大ダコ、つまり超ダコと対峙する。



「どうも神です」

マリアの眼前に座る男はそう自己紹介した。

「こ、ここは……」

マリアは困惑の表情で周囲を見回す。彼女がいる場所はルナ・マウンテンの戦場から、掃除など有史以来一度もされたことがなさそうに見える汚い部屋に変わっていた。

「どこだ……？」

部屋はぞっとする程に汚く、あちこちに本棚に入り切らない量の薄い書籍——例外なく粘性を持った白い液体で顔や胸元を汚された美少女が描かれている——が山積みになれ、その間には脂ぎったスナック菓子の欠片と栗の花臭い丸まったティッシュが散乱している。

「お前は誰だ!？」

「俺を知らない？」

マリアがアブラスに噛まれた傷が消えている喉元に触れながら問うと、一目で運動とは無縁の生活を送ってきたことが容易に伺える肥満体が裏返った声を発した。

「知らない？ マジで？ 境界の超大物である俺を？」

汗ばんだ白いタンクトップとトランクス姿の臭い男は性格の悪さと自己顕示欲の強さが如実に現れた非常に嫌味つたらしい口調で自分を指差す。

「俺は名無しの東北県人。この世界を司る全知全能の神だ」

本編に続く



<http://humandust.blog.fc2.com/>